

新潟・馬場・天神腰遺跡

1 所在地 新潟県柏崎市南条
2 調査期間 一九九一年(平3)八月～一月・一九九二年六月～九月

3 発掘機関 柏崎市教育委員会

4 調査担当者 品田高志

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 一二世紀～一六世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(岡野町・柏崎)

馬場・天神腰遺跡は、柏崎市街地の南東約8kmに所在する。遺跡は、柏崎平野を北流する鯖石川と、東流する長鳥川が合流した南東側の段丘上に位置し、標高は約二三mほどの平坦地である。遺跡の範囲は、現在の南条集落全域を含む東西四〇〇m、南北五〇〇m、面積としてはおよそ一六万㎡程と推定さ

れている。

当該地一帯は、佐橋荘に属し、南条はその中心部と目されている。佐橋荘は、その開発領主を不詳とするが一世紀中頃の成立とされ、承久の乱以前には大江氏が地頭職を得ていた可能性が指摘されている。大江氏(後の毛利氏)の在地支配が本格化するの、一三世紀中頃の宝治合戦後、広元の孫経光が南条に在住して以降と考えられる。毛利氏は、南北朝の内乱を経て、佐橋荘と西接する鶴川荘に勢力を広げ、戦国時代に活躍することになる。長鳥川対岸の北条は、戦国期における北条毛利氏の要害(北条城)とその城下町であり、今も多くの寺院が残っている。

馬場・天神腰遺跡の調査は、市道の新設工事に伴うもので、幅約一三m、延長約三八〇m、調査面積約五〇〇〇㎡であった。調査された面積は、遺跡全体からすれば極めて狭い。今回の調査で窺える遺跡の特徴をまとめると、東西にほぼ直線に伸びる幹線道路と、南北の支線道路を直交させて屋敷地を区画するなど、都市的な土地区画整理がなされていたことである。現在の南条集落にも、規則的な区画が認められており、ほぼ遺跡全体に及ぶものと類推できる。この土地区画は、一二～一三世紀には整備され、一四世紀代に再整備がなされ最盛期を迎えるが、一五世紀代で衰退に向かい、一六世紀に至ると遺構の分布も限定されてくる。今回紹介する木製卒塔婆は、一六世紀の遺構が確認できた天神腰D地区から出土した。

天神腰D地区からは、建物・井戸等多数が検出されたが、木製卒塔婆はSX八一九井戸から出土した。この井戸は、他に比して特殊な形状を呈する。上面プランは、一辺約3mほどの隅丸方形形状を呈して大きく広がり、一边を張出させて石敷を設け、中央部は深くして井戸状をなすものである。石敷内には、大小の川原石に混じり、珠洲焼、越前焼、茶臼、石塔部材等が含まれていた。

木製卒塔婆は、井戸の中層位から自然木に混じり検出された。卒塔婆等は九点検出され、主軸に対して直交し、ほぼ同一レベルで敷き並べられていた。九点のうち、文字を確認できたものは三点、その形状から文字が書かれていた可能性のあるもの二点の合計五点であるが、この他にも文字が記されている可能性は否定できない。井戸最深部からは、木根と長さ約1mほどに輪切りされた直径三〇cmの丸太が出土している。

8 木簡の釈文・内容

木製卒塔婆の大きさは、長さ1m～1・5m、太さ一〇cmほどであり、その形状は、曲がりくねった枝状の木を材料とし、下端を杭状に尖らせ、上端も鉛筆状として、その下部両側に切り込みを入れている。文字面は、一面を平坦に削り出して墨書する。文字は二列で上下二段に分けられているらしく、上段には経文風の文字が、また下段には年号・日付等が記載されているらしい。

文字の判読作業は、現在整理・報告作業が中断したままであり、

今後の課題であるが、判読できた文字の一部に「天正」がある点は注目される。卒塔婆の文字配列位置から年号の可能性が高く、石敷出土の越前焼の年代観とも大きく矛盾せず、これらが天正年間の所産である可能性は大きい。天正年間前半は、越後における重要な画期をなし、北条毛利氏の滅亡と関わる時期でもある。木製卒塔婆の解読作業は、当時の葬制や本地域の中世史の一端を示す重要な資料を提供するものと期待できる。

9 関係文献

品田高志「馬場・天神腰遺跡」『埋文にいがた』二 勅新潟県埋蔵文化財調査事業団 一九九三年

品田高志「馬場・天神腰遺跡の中世集落について」(新潟県考古学会『新潟県考古学会第五回大会研究発表会発表要旨』一九九三年)

(品田高志)